

# この夏に思ったこと

副会長 杉浦 潤一

今年の夏は例年になく早くから暑かった。わが家の庭でセミの幼虫が抜け出した穴を初めて見つけたのも梅雨明け前の7月初旬で異例に早かった。季節のマーカールになるウグイスの初鳴きとかコオロギの初鳴きなどとともに毎年日記にメモしているのだがこんなに早かったことはない。地球の温暖化に代表される環境変化の徴候の一つかと不安にもなる。

毎日穴の数が増えあちこちの木に抜け殻が見られるようになった。夜の庭で、山歩きに用いるヘッドランプをつけてセミの脱皮を久しぶりに観察した。手に汗をにぎり息をこらして見ていた少年時代の感動のシーンがよみがえった。テレビの明瞭で美しい画像よりも、ヘッドランプも消して暗順応だけの眼で見る単彩に近い色の動きの方がはるかに神秘的である。

遠い夏の日々、田舎ではこれらセミ、トンボ、キリギリス、バッタやフナ、ハヤ、モロコ、ハゼなどを捕ることが仕事であり遊びであった。残酷に殺してしまうようなことも数知れずあったが、育てる道具も餌もノウハウもなく、台所から親の目を盗んで手にいれた当時貴重な砂糖を綿に浸し、カブトムシやクワガタを今の子ども以上に大切に飼育したこともあった。

「坊、お盆の間だけでもトンボやセミを捕まえるのは止めておくれ、いい子だから」と毎年お盆が来ると祖母から聞かされた。「うん」とあいまいな返事をしては見つからないようにいつもと同じように捕まえてきたのだがセミを鳴かせて気がつかれ祖母をがっかりさせもした。

セミやトンボは祖母に「佃煮にするくらい捕ってきて、可哀想に。」と言われるくらいつねにいくつのかごにいっぱい居た。もちろん、ほとんどが数日で死んでしまう。ときには祖母の言うことを聞いて全部をかごから放してやることもあった。田舎ではこのようなとき必ず「盆に米一升持って来いよ。」と言って放した。高い空に舞い上がっていく姿を惜しみながらもいいことしたかなと思う気持で見送った。勝手に捕まえてきて命を助けてやったからお礼に米を持って来いとはずいぶん身勝手な話しだが、命を助けるといういいことをすればむくわれることがあるという教えでもあったのだろう。今でも、たまだが庭にトンボが来るとつい捕まえては、しばし手にして眺め楽しんでから「盆に米一升持って来いよ。」と口ずさんで放している。

そんなことを重ねたある年おそらく5年生のときと思うのだが、ツクツクハウシが鳴くころ虫たちを殺すことをぷつぷつ止めたのを思い出す。捕まえて遊んだり飼った

りはしたが、かつての無駄に死なせるようなことはしなくなった。思春期の入り口だったかも知れない。

戦後の貧しい食生活でいつも飢えていたのだが、それがどういう日であったか記憶はないが、ニワトリの肉がたくさん入った鍋を家族で囲んで久しぶりに「おいしい、おいしい。」と腹いっぱい食べて満足した。翌日いつものように眼をさましてニワトリ小屋に行くと6羽のうち2羽居なくなっていた。きょうだい4人がお気に入りのトリにそれぞれ名前をつけて可愛がって昼は庭に放し追いかけていたりしていた。あちこち探しても居ないので祖父に尋ねるとにこにこして「お前たちのおなかの中にいるよ、タベおいしいおいしいと言って食べてだろ。」。ぼくらは泣きべそをかいて皆で祖父を力いっぱい叩いた。時間がたって落ち着いたころ、祖父はおだやかではあるが厳しい表情でわれわれは他者の命を奪って生きていることを諭すように説いた。姉とぼくしか理解できないことだったがしーんとして聞いていた。「可愛がっていたからニワトリもお前たちに命を捧げてきっと喜んでるよ。感謝して一生懸命勉強することだね。」

自らもたくさんの命を奪い、また、命の奪われるのを目にしてきた体験によって命を大切にすることを学び他者に対する思いやりを教えられてきたと思う。

スーパーマーケットができる前は肉屋の店先では丸裸にされた原型をとどめるニワトリを見たし、ひづめから太腿までの豚や牛の足がぶらさがっていた。プーブーと愛嬌のあるブタや農作業に無くてはならない身近なウシとわれわれが食べている肉とが同じものであることは幼いころから体験で知っていた。今の子どもたちは、切り身にされてきれいにパックされた肉と愛くるしく歩き、鳴くニワトリやブタやウシが同じものであることを知識として持っていてても実感は乏しいのではないだろうか。命を奪っておいしい焼肉にありついていると実感できる子が何人いるだろうか。

ずいぶん前だがある学校で教室にシートを敷き専門家によるブタの解体作業を見せる授業をしたドキュメントを読んだことがある。反対もあったそうだが周到な事前の教育と慎重な配慮の上で実行された。初め、眼を覆っていた子どもたちは皮から腸まで無駄なく利用されわれわれに役立っていることを目の当たりにしてその後大きな変化を示したという。給食を残すことが少なくなった、無用な喧嘩騒ぎが無くなったことなど報告されていた。

きれいごとではなく事実を肌で知る機会を子どもたちに提供するのでもわれわれ大人の役割ではないだろうか。命あるものに触れその死を体験する機会がないまま命の大切さを説いても実感できないと思うが。子どもたちが虫を捕るために種が絶滅するという心配よりも環境破壊の影響による方がはるかに大きいと言われている。

地球家族の1人としてさまざまな生き物に接して育ったなら今の子どもたちの状況は違ったものになったのではないか。大人たちが子どもたちからそのような体験を

奪ってしまったことは反省しなければならない。

自分自身、命の大切さを唱えながら、日常食べるものは全て命を奪ったものばかりであるし、育てている花を枯らすコガネムシの幼虫を見つければ「ごめんな。」とは言うもののつぶしてしまうし、コガネムシも天敵みたいに見つけ次第捕まえてしまう。それらの命以上にどう生きるかを常に考えて生きたいものである。